

英語を専門としない学生にとっての英語教育

English Education for Non-English Major Students

付岡 京子*

Kyoko Tsukeoka

序

本学では平成13年度から、英語学科が学生募集を行わない事になったので、平成14年度からは、短大は住居学科と社会福祉学科のみで構成される事になる。両学科共、基礎教養科目のカリキュラムのスリム化で、英語は従来は1, 2年を通して、通年科目、英語Ⅰ及び英語Ⅱが必修として課せられていたが、新カリキュラムでは、卒業迄に半期科目1つ、即ち最低2単位以上履習すればいい事になった。基礎教養科目は講義演習を問わず、半期で2単位与えられる事になったので、実質的には従来の1/4の履習で卒業できる事になった。このような劇的ともいえる授業時間数の激減で、半期週1回わずか15回未満の授業で何ができるのか、教科担当者の間ではとまどいがあるのも事実である。当初半期完結の案が出た時には、半期で単位を出すかわりに、週2回授業を行う、いわゆる半期集中型を考えていたのだが、現状でも英語が重荷の学生にとっては、半期集中型だと尚きつい事になってしまう可能性が強く、学生の負担の軽減にはつながらないという事で、週1回の半期完結型をのむ事になった。「習うより慣れる」の語学で、授業時間数の激減の影響は大きいと思われる。それを克服する為にはどうした

らいいのか、学生の英語教育に関する意識と現状を把握する事を目的に、前期末に行ったアンケートをもとに、英語を専門としない学生にとっての英語教育のあり方を模索したい。

アンケートの結果と分析

平成13年度筆者が担当した英語Ⅰ及び英語Ⅱの受講者を対象に、前期末に実施したアンケートの軸は、各学生自身にとっての英語の必要度、予習の有無、教科書の持ち帰り状況を把握する事であり、あわせてどうしたら英語が上達すると思うか、更に授業に対する要望等、自由記述方式で書いてもらった。対象となった学生は、児童福祉学専攻1年1クラス（当日出席者40名）、児童福祉学専攻2年1クラス（当日出席者36名）、住居学専攻2年2クラス（当日出席者15名+28名）で、記名したくない学生は無記名でもよい事にして実施したが、大部分の学生は記名をしていた。

まず必要度に関してしてみると、大部分の学生は専門外ではあっても、英語は現代の国際社会において必要だとの認識はもっているようだ。特に住居学科の学生は海外研修のプログラムもあり、実際に外国に行って外国語をしゃべる必要性に迫られた経験をもつ学生がいた事もあっ

*英語専攻

てか、英語の必要性を感じている学生の方が圧倒的に多く、英語は苦手好きではないが勉強したいと答えた学生が、児童福祉学専攻の学生にくらべてかなり多い。但し住居学専攻の学生の中には、一般論としては英語は必要だと思うが、自分自身は使う事はないと思うと答えた学生もいる。一方児童福祉学専攻では、英語は自分にとって必要ないとはっきり答えた学生が、1・2年各10名前後いたのに対し、住居学専攻では必要ないと答えた学生は、2クラス合わせてわずか2名で、しかも兩名共、必要はないがやっておいて損はないと思うと付け加えている。唯意識としてこれからは英語が必要になると思うので勉強したいと答えた学生が、実際に勉強しているかという点、事情は違ってくる。

そこで予習に関してしてみると、児童福祉学専攻の一年生は、予習はしないと答えた学生が圧倒的に多い。予習をたまにはすると答えた学生を入れても、予習すると答えた学生はわずか5名で、その7倍の35名の学生は、予習はしないと堂々と述べている。筆者が学生の頃は、予習をしていないとひげ目を感じて小さくなっていったものだが、近頃の学生は予習をしていなくても悪びれる様子が全然ない。教科書も半数の学生は家に持ち帰らず、ロッカーに置きっぱなしにしていると答えている。更に家に持ち帰っていると答えた学生の中には、たとえ家に持ち帰っても、課題やボランティア、アルバイト等で忙がしく、英語を勉強する時間がないと述べている学生もかなり多い。

2年生に関しては同じ児童福祉学専攻でも、事情はちょっと異なる。勉強したくないと答えた学生が多いわりには、「たまに」、「授業の直前」、「時々」と断っている学生が多いものの、予習をしていると答えた学生が、予習をしない学生の2.5倍の25名いる。なかには例外的に、英語の予習に使う時間は1時間から2時間、更に1人だけではあったが、4時間から5時間予習にかけると答えた学生もいる。教科書をロッカーに入れてある学生は8名で、その約4倍の大多数の学生は教科書を家に持ち帰っている。

又逆に、教科書はロッカーに入れてあると述べながら、予習をしていると答えた学生もいるので、こういった学生は授業直前のわずかな時間、又は授業中他の人がささされている時に予習をしているものと思われる。授業中の予習という事になれば、その間教師の説明や他の学生の答えは聴いていない事になるので、大事な事を聴きのがす事もあり得るし、かえって学習の妨げになりかねない。確かに児童福祉学専攻の2年生の場合、予習をしている学生の割合は多いが、大半の学生の場合、授業直前にちょっと辞書で単語をひく事で予習をしていると答えている学生を含む数字である事を考え合わせると、予習の程度や内容に関しては疑問が残る。一方住居学専攻の場合は、予習をしている学生と、していない学生の方が、ほぼ拮抗している。

ところで、「授業中に指名されてから、他の学生を待たせて長々と辞書をひく事をどう思うか」と質問したのに対し、自分で調べる事はいい事なので別にかまわないと答えた学生が圧倒的に多く、他の学生に迷惑をかけているといった意識をもっていないのは、驚きであった。他の学生の勉強の進行を妨げないように、授業に入る前に前もって調べておくべきだと考えている学生はごくわずかだ、大部分の学生は、指名された学生が答えるのに手間どっている間に自分も調べられるので、むしろ好都合だと述べている。筆者にとって予習というものは、その日やる所にあらかじめ目を通し、どこがわからないかをはっきりさせておいて授業に臨む事だと考えていたが、少くとも本学に於ける今の学生の大部分は、その作業すべてを授業中に持ちこんで、答を覚えてもらう事を期待しているように思える。今使っているテキストだと、語句の欄に出ている単語の意味を辞書であたり、最初の方に出ている意味をノートに書き取れば、それで予習は済んだと考えている学生が多いのではあるまいか。英語は実際には一つの単語がいろいろな意味をもっているため、それぞれの特定の文脈の中でどのような意味で使われているのかを考える事なしに、唯機械的に辞書の前の

方に出ている意味を書きとめるだけでは、文の意味がとれなくても当然であろう。辞書をひいたら、その語が使われている元の文章にあたって、そこでどんな意味に使われているのかを考える事が予習であるのに、そこ迄考えようとしなない。というより大部分の学生は考える事ができないというのが、現状だと思われる。

予習をしない理由に、予習のしかたがわからないからと、はっきり述べている学生も少なくない。つまり単語をひいても自分一人では文の意味がわからないので、嫌になって予習をしなくなると答えている。文法を押しつけられた何か面倒くさいものと受けとめている学生が多く、文意をとるのに役立つ便利なものとは思っていないので、文法嫌いとなり、会話だったら楽しく学べるのではと淡い期待を抱いている。

多くの学生が英語をしゃべれたらかっこういいと思っており、外国人の先生に習えたら、知らず知らずの内に英語が上達するのではないかと期待している。語学の場合、特に話す事に関しては、確かに雰囲気によって、話し易かったり、逆に言葉が上手く出てこない事があるのも事実である。日常生活の中でいろいろな言語が交錯するヨーロッパ等と違って、日本にいて、特に日本人同志の間だと、英語を話す事が場違いな感じがして気恥かしく、しゃべり難い事も事実である。外国の空港に降りたつとたん、自然に英語が口をついて出易くなった経験をした人は多いであろう。外国人の先生だと雰囲気だけでなく、何とか必死に英語で自分の意志をわかってもらおうとする気持が強くなり、英語を話す事の必然性が、日本人の教師に対してより大きくなるのも、事実であろう。しかし会話でも、挨拶程度のものなら雰囲気だけでのりきれるかもしれないが、もう一步進んだ内容の話になると、雰囲気の助けだけでは済まなくなってくる。つまり総合的な英語力がなければ、それ以上は手も足も出なくなってしまう。

会話は相互作用であり、自分だけが一方的にしゃべりまくっていたのでは、会話にならない。まず相手のいっている事が理解できなくては、

会話は成り立たない。外来語、カタカナ語があふれているとはいえ、会話レベルで日常的に英語を耳にする機会は、日本人の場合極端に少ない。その事実を自覚して、かなり意識的に聴く事を心がけなければ、聴解力の上達は望めない。リーディングに関しても同じで、読む量が少なければ読解力の向上は望めないし、語いそのものも貧弱になる。何回も耳にし、目にして初めて単語も記憶に残り、身につくのではないだろうか。即ち自ら意識的に地道な努力をしなければ、英語力は身につかない。本学の場合大方の学生が、英語上達の鍵は予習復習をきちんとする事だと述べつつ、実際には実行が伴わず、自分では努力せずに、囲りの環境や人に期待しているふしがある。

入試の時の競争が緩和され、多様な入試方法が取り入れられて、いわゆる学力試験のふるいにかけてられる事なく入学してくる学生の数がふえてくると、特に英語のような積みあげの科目は、学生間の学力の差が大きくなってしまふ。例外とっていい程ごくわずかではあるが、テキストが易しすぎると不満を述べている学生がいる一方、できない人にあわせて授業をしてほしいと書いている学生もいる。なかには中学の時から英語はわからないまゝきてしまったといってくる学生もいる。特にこの数年、90分間じっと教室に座っている事が苦痛な学生が目につく。授業中お手洗いに行つたまゝ戻つてこなかったり、遅刻をしてくるのも、自己防衛策なのかもしれないと思える学生もいる。テキストを広げようとしなかつたり、広げていても現在やっているところに視線がいていなかつたり、机にうっ伏してしまつたり、つらそうなのがみとれる。チャンクごとに区切って後について云うようにいっても、口を開こうともせず、すっかり投げ捨てしまつている学生もいる。専門科目の課題やレポートに手一杯で、英語に迄手が回らないといった時間の制約の問題の他に、英語の基礎がほとんどないまゝ、短大にきてしまつている為、英語に対する苦手意識が強く、前述のように、辞書をひいても文章の意味がわからな

い事が多いと、ますます英語が嫌いになるようで、現実問題として、一人では予習そのものができない学生が大部分だという現実を認めざるを得ない。かつては学生が予習の段階で一人で行っていた過程を、授業中に逐一ヒントを与えながら指導する必要がある。いいかえれば勉強のしかたそのものから始める必要がある。又挨拶程度ができればいいと考えている学生がかなりいるようで、それ以上に踏み込もうとするとおっくうがったり、興味をなくしたりするようで、英語を思考の手段として受けとめてはいないように思われる。思いの他学生の自分自身に対する要求水準、いいかえれば到達目標が、こと英語に関しては低いのではないかと思わざるを得ない。一方、自分はリーディングが得意なので、この程度のテキストには予習は必要ないと答えている学生もいるが、前期末の試験結果は、必ずしもそれを裏付ける程優秀ではなく、事実以上に自己評価が高いように思われる。客観的な現実の認識は容易ではない事を伺わせる一例であろうか。

授業に対する要望では、ビデオの音量が小さすぎて聞こえにくい、教師の声も聞こえにくいというのが一番多かった。ビデオに関しては、いつも音量を最大限に上げて聴かせているし、筆者も大きな声を出すよう常に心がけているにもかかわらず、一度ならずいわれるので、LL教室の場合はヘッドホーンを通して聴かせる事にしたところ、すぐに音がやかましいといっておろしてしまう学生がほとんどだった。一つには何人かの学生が自ら認めているように、授業中のおしゃべりが多い為、雑音が入って聞こえにくい事、もう一つは日本語とは音韻体系がまったく異なる英語を聴く時に、日本語的な発音を期待して聴いている為、聴きとれない事が大きいと思われる。つまり英語は日本語と違って、stress-centered languageといわれるように強弱のある言語であるので、物理的に聞こえにくいところがあって当然であり、聞こえにくいところを補って聴く練習をしなければ、生の自然な英語は聴きとれるようにはならない。それに

もかかわらず、よく聞こえるようにはっきりいってほしいと要求する事は、英語を日本語的発音で話してほしいという事に他ならない。つまり聴きとりにくいのは、必ずしも物理的な音量の為ではなく、英語的な発音に慣れていない為に聴きとれないのだという事に気付いてもらう必要があるように思う。自分が日本語的英語で話していれば、聴く時にも日本語的英語を期待して聴く事になり、これではいつ迄たっても自然な英語は聴きとれない。発音等どうでもいいという人もいるが、この意味で筆者は、やはり正しい発音を心がけて話したり読んだりする必要があると考えている。

これからの英語教育

日本の英語教育は、中学、高校、大学とずいぶん時間をかけているのに、使える英語力がついていないという批判は、よく耳にするところである。その為審議会等もおかれていろいろ論議されているが、英語教育協議会の専門チームがまとめたELEC Crossroads Project 政策提言「英語教育の目標および目標達成の方策」English Language Education Goals and How to Achieve Themは、本学のこれからの英語教育に参考になると思われる内容を含んでいる。提言では英語教育を、対象者と目的別に二つにわけている。一つは国民一般を対象とした基礎英語力の定着を目的としたものであり、もう一つは国際的に活躍する人材の育成を目標とする大学の必修科目の一部の授業を講義のみならず、レポートも討論もすべて英語で行ない、必要とする人に仕事にも使えるより高度な運用力のある英語を身につけさせるものとしている。この二つを明確に区別しないと、国民一般に過重な教育目標を設定する危険性があると警告している。

基礎英語力の定着に関し、提言では高校卒業迄に中学英語、即ち英検3級程度の英語の定着を目指すとしている。中学英語がきちんと定着していれば、実用に充分役立つといわれている

がら、現実には中学レベルの基礎力が未定着のまま、高校、更には大学に迄来てしまっている学生も多い。なかには高校生になって尚かつアルファベットの読み書きも満足にできない生徒がいる事実も、指摘されている。この事に関しては、数年前に筆者自身、本学のスクールバスの中での学生同志の会話を偶然耳にし、短大生がアルファベットでつまづいているとはと、自分の耳を疑ったのをよく覚えている。アルファベットの読み書きができない学生は例外としても、中学三年間で習う範囲の英語が定着しないまま卒業してしまう生徒の数は、週五日制の導入やゆとり教育の推進で、学校での英語の学習時間が減少するにつれ、ふえているのが現状で、短大でも中学レベルの英語の基礎力が未定着のまま入学してくる学生はもはや例外ではなく、学生の大部分を占めている短大がふえてきている。

ところで英語は日本人にとって第二言語ではなく、外国語であるので、前述のアンケートの結果にもみられるように、日常生活での必要性はほとんどない。それ故英語学習の為のニーズ動機がどうしても希薄となる。一方言葉をマスターする為には莫大な学習時間が必要で、しかも毎日繰り返す事が求められる。中学レベルの英語でも、運用力をつけて定着させる為には、3年間で1000時間位の学習時間が必要だといわれている。先の英語教育協議会のプロジェクトチームの試算によると、中学1年で週8時間、中学2年、3年で週5時間程度にすれば、かなり効果が期待できるとみている。これは大方の私立の進学校では実施されている授業数ではあろうが、公立中学ではとてもこれだけの授業数を英語に割当てる事はできない。そこで提言では、最低週4時間の授業数を確保する事が必須であるという観点にたつて、学年別の傾斜配分による特定年度での集中学習を、具体策として提言している¹。

英語力の国際比較をする場合よく使われるのは、TOEICやTOEFLである。その一つTOEFLの国別得点の推移（1964～1999年）²

をみると、1964年に日本より下位にあったタイと韓国が、1999年には共に日本を抜き、飛躍的な得点の伸びをみせている。特に韓国は1960年代の終りに日本を抜いてから、終始順調な伸びをみせており、1999年にはタイや日本のみならず、香港をも凌駕している。英検は日本国内でのみ通用する資格だが、TOEFLはグローバル・スタンダードに基づいた評価といえる為、最近ではTOEFLの成績を学生の英語の科目の成績評価に取り入れたり、入試に活用する大学も出て来ている。1999年度には177の大学で入試に関してTOEFLの優遇措置がとられている³。東大でも「大学院修士課程入試に新領域創成科学研究科・環境科学研究系の一部のコースがTOEFLを活用」と新聞にも報じられた。一方早稲田大学理工学部では、2000年度から英語IのカリキュラムにTOEFL-ITP (Institutional Testing Program) を取り入れている。これにより従来週2回の授業だったのを、コンピューター教材の使用と語彙・フレーズ集の自主学習との併用により、授業を週一回に削減、結果として財政処置を伴う事なく少人数制の授業が可能になったといわれる。年4回のユニット試験で平均70点以上、それと2/3の出席で合格評価となり、成績はTOEFL得点域によるとしている⁴。尚前述のELECのプロジェクトチームは、高度な英語力養成の具体策としてTOEFLやTOEICの活用を視野に入れて、公益を担う公務員の上級職に対して、高度な英語の資格取得を義務づける事も提言しているが⁵、これからTOEICやTOEFLの活用は、ますますふえてくるものと思われる。

ここで本学の現状に立ち戻って、これからの本学に於ける英語教育について考えてみたい。先にみてきたように、本学の場合、中学レベルの基礎英語力が未定着のまま入学してくる学生は例外ではなく、多勢を占めているという現実の上にたつて考えると、週一回半期完結の一斉授業の中でTOEICやTOEFLを活用する事は難しいというより、不可能に近いといわざるを得ない。早稲田大学の理工学部でTOEFL活

用のカリキュラムが機能しているのは、かなりの学生が英語で論文を書く必要性があるという動機づけもあろうが、何よりもまず第一に、学生が自主学習をこなせるという事が前提となっている。一人では予習もできない学生が多い本学とは全く事情が違ふ。こういった現状にてらして本学の英語教育のあり方を考えると、大半の学生の到達目標は、疑いもなく中学レベルの英語の基礎力の定着であるといえよう。これ迄は学生のプライドを傷つけないようにとの配慮から、中学英語という言葉を使う事すらはばかってきたところがあるが、最近では学生自身があからさまに中学の英語もわからないと口にするように変わってきている。むしろわからないまゝ先に進まれる辛さの方が大きくなっているのではないかと思われる。それだけ事態は深刻になってきているともいえる。

ではどのようにして基礎力を定着させたらよいのか。先にも述べたように、まず定着には膨大な学習時間が必要だという事を学生にも自覚してもらわなければならない。しかも繰り返して学習する必要がある。学習時間は多ければ多い程望ましい。しかし現実には短大のカリキュラムは基礎教養スリム化の方針にそって逆の方向にいており、英語は半期科目一つとれば卒業の要件をみたく事になった。新カリキュラムでは、選択科目として基礎英語、英会話、コンピュータの英語、資格英語の4科目がおかれるので、希望すれば複数の英語科目を履修する事は可能だが、実際には課題や実習、レポートに追われている学生が、苦手の英語を卒業に必要な単位以上に履修する可能性は低い。半期週一回の授業だけで基礎英語力の定着をはかる事は至難のわざだが、できる事から始める他ない。予習してくる事は期待できないのだから、まずはじめは授業中に辞書をひかせて一緒に考え、予習のしかたを具体的に教える事から始めて、何とか自分で考えて意味がとれるようになるだけの基礎を限定して繰り返しやって覚えてもらう。何でも安易に人に教えてもらうのではなく、自分で何とか解きあかす。そしてわかった時の

喜び、感動を味わえるよう、学生自身積極的に真剣に取り組んでほしい。巷には昔と違ってヒアリングの教材もあふれている。費用をかけなくともラジオやテレビを利用する事もできる。英語にふれる機会がふえればふえるだけ、定着も容易になる事を理解して努力してほしい。要は学生の努力いかにかかっているのか、教える側にできる事は限られているが、せめて応用のきく考え方の基本だけはマスターして卒業できるように、手助けしたい。そして何年か先には、短大入学迄に中学レベルの英語をマスターした学生が集まり、上級者向けのクラスが開ける日がくる事を願っている。

注

- 1 平成13年1月27日 ELEC Crossroads Project 政策提言シンポジウム、専門チームメンバー 高島英幸氏資料 p.2.
- 2 同上 p.4.
- 3 平成13年7月23日 国際教育交換協議会 (Council) 日本代表部 2001年度 TOEFL-ITP セミナー資料 p.4.
- 4 同上 pp.5~8.
- 5 日本経済新聞 (平成12年9月30日) 教育欄 ELEC プロジェクトチーム座長 金谷憲氏寄稿